朝日新聞

朝日新聞　２０２５年６月２０日　朝刊　２５ページ　東京本社

障害あってもなくても 投票行こう

一文一文について議論しながら辞典をつくる知的障害の当事者ら＝大阪府東大阪市

「せんきょのことば辞典」完成

知的障害がある人、障害がない人が力を合わせ、選挙や政治にまつわる言葉をわかりやすく解説した「せんきょのことば　選挙学習小辞典」をつくりあげた。全国の障害者らに活用してもらい、選挙で自ら投票する喜びを広げたいという。

辞典は約240字で15章立て。選挙や政治に関わる約170の言葉が、ひらがな表記の「分かち書き」で解説されている。例えば、選挙公約についての記述はこうだ。

「せんきょにでる　ひとは　わたしたちに　いろんな　やくそくを　します」

「せんきょにでる　ひとの　やくそくを　せんきょ　こうやく　といいます」

民主主義、基本的人権、普通選挙、国民主権などの解説もあり、衆議院と参議院の違いや選挙で投票するまでの手順、どのようにすれば候補者の公約を知れるかなども紹介している。

辞典づくりには、大阪府東大阪市の社会福祉法人「創恩苑」が運営する事業所で働いたり、暮らしたりしている知的障害のある当事者らが携わった。

創恩苑では、2023年から候補者の公約を調べて模擬投票をするなどの勉強会を続けてきた。

勉強会を提案したのは、高齢者の言葉の使い方やコミュニケーションなどを研究してきた元関西医科大准教授の菅谷泰行さん。障害者の暮らしや人権の問題に直結する選挙を通して社会参加し、自分で考え、選ぶ喜びを知ってほしいとの思いからだった。

23年の東大阪市長・市議選、24年の衆院選などは実際に投票に行った。創恩苑の担当者は、自分で考えて一票を投じるメンバーは「堂々と充実した表情をしていた」と言う。それと同時に「機会があれば当たり前にできることなのに、できてこなかった現実を考えるようになった」とも話す。

もっと多くの人が投票に行きやすくするには――。そう考えて始めたのが、辞典づくりだ。菅谷さんが文案を考え、メンバーが意見を言う。

「選挙公約の説明に例を入れてほしい」「文章が長い」。どうすればより分かりやすくなるか、一文一文について力を合わせて考え、修正していった。

菅谷さんは「障害者の『やさしいことば』は、障害がない人がある人に一方的に与えるのではなく、ともにつくりあげるもの」と話す。メンバーの豊田英一さん(41)は「大変やったけど、すごい本ができた」と言う。

創恩苑「せんきょのことば」ホームページのQRコード

辞典は創恩苑のホームページ＝QRコード＝で公開している。

5月からは北海道や東京、九州の障害者らの団体と一緒に、辞典を使って選挙について学ぶ取り組みも始めた。7月の実施が見込まれる参院選も、投票に行く計画だ。

メンバーの梅原義教さん(50)は「全国にこの本を配り、（障害者が）投票できるようになったらいいなと思う」と話している。（前田碧）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。